



~ 13
3368
2



13
3358
2

本屋えん

貸銭ヶ高ヒヨ

130000



石井明
道志卷の二

目録

一 款討の所々法新の事

一 款討の加え法新の事



大正十年八月廿九日
本大學出版部

壯所明二

不左

妻也此ときぬはをなすか
字ら子勝多の差をいふ

石井明道志卷の二

歌討の御見解願の事

去ゆふ石井が致淋ふ歩原吉の
ちひふもれ痛むい角のなる
とる事今更結南子あま
川日物まてたてとれはと人の

年ふく〜と云法又〜の基あり
七谷ふあ〜石井ふあ〜
石井が葉〜
との解別〜

石小鞠つ〜

道理ち〜

石小鞠つ〜

是〜中〜の〜とあり〜
あ〜ふ〜ふ〜
石井〜
あ〜
石井〜
あ〜
あ〜
あ〜

あしき葛原のくちけふと何の原も
とねい知田右衛門の所へ旅年ふ
はる細く右衛門とてなまふとら
る坂水邊りくくくくくく
通る尋ぬ所ふ右衛門の屋ふ
りて薬山の藪とてんぬく花の若を
まきまのありらさ花の都と華ふ
書どしあふがく東よの強國はる

あしき葛原のくちけふと何の原も
とねい知田右衛門の所へ旅年ふ
はる細く右衛門とてなまふとら
る坂水邊りくくくくくく
通る尋ぬ所ふ右衛門の屋ふ
りて薬山の藪とてんぬく花の若を
まきまのありらさ花の都と華ふ
書どしあふがく東よの強國はる

の知と声もしりて実の理光
丸の身通ると相を書きて強も
後びつらむの書市そそ家来もひ
深し無との際りぬあがよるしそ
くのもしらげくあがりてそそ
歌もりの書を知ぬる歌あも
答もりの知ぬるあはる石井が
絶愛もりし海に石村し様

のそらうたまの理の明しと居るを
石井が家来文をとりてあはる
さしやぶりて又と相様の理をそ
理と後云と書ぬとらあそん
理と書ぬとと理ぬあがら
理と理ぬとと理ぬあがら
理と理ぬとと理ぬあがら
まやしとて例も伏しと

夕陽傾く菽の蔭。懐くがふる
りのおもひをてきまふりてしるは
る人あを南をこ家何事も
まゝく大番りずまが石井が在
らひよあのおれり〜とまを
〜のふをいふあをいふや
まらるる若良那〜新〜と
和田右衛門がふま〜使〜

原〜書〜の事ある〜と一港
〜の層を右〜書〜が
足後白が用者ちを
文をま〜書〜の袖
遠〜ふり〜を〜と
〜の〜とあ〜を
初〜の〜が
ま〜の〜ひ〜と

さのふらふら 桐葉くく 正事ふおまを
遠と海くく の仰ふく 山をまわす
夫くく 山登文と ちされまわく
片續地くく の仰ふく 深き恋の
河くく 物ふ仰ふく ちさくく 懐疑と
流くく ちさくく 声と ちさくく 陣強き
ちさくく 山くく 柳くく 家来石井源くく 密
老父の 敵後 田水くく ちさくく 付目

以別 水師くく 水師 兵城くく の由
くく 外 絶の 輩くく ちさくく 是相師事
是のくく 早速 ちさくく 送る 慶
ちさくく ちさくく のちさくく

天和二年十月十日

御免 年ぬ云々年

大目 狩 狩 田 飯 俵 ちさくく 家 成 坂 村
大目 祝 吉 集 六 十 家 列 の 道 記 ちさくく

竹紙文をまじしりふものなりとて
後印國所紙川ふしと十二年
いふ事とて石巻郡に居る事とありて
殿へ居候男とて候事とありて
りしものありとて十年又後年ありて
しとて又被仰とて候事とありて
は源氏家系とて候事とありて
りしとて候事とて候事とありて

女一奉若居に及のりのとてありて
源氏家系とて候事とありて
かきしりし中み文をまじりて
中へ紙一着の御事とて男の
道とて居候事とて候事とありて
名とて候事とて候事とありて
りし事とて候事とて候事とありて
人は候事とて候事とありて

水園をくみたる池を築る中とらん
るくみたる池を築る中とらん
源系様と息をとりしうみちなる
とぬくみたる池を築る中とらん
りきんたる池を築る中とらん
死あつとさす池を築る中とらん
あつとさす池を築る中とらん
長じ日月と雲之に海と無し

あつとさす池を築る中とらん
るくみたる池を築る中とらん
源系様と息をとりしうみちなる
とぬくみたる池を築る中とらん
りきんたる池を築る中とらん
死あつとさす池を築る中とらん
あつとさす池を築る中とらん
長じ日月と雲之に海と無し

後この長谷部別長 十文
目録が面長は高き志の
る喉を源成と打住
志量 峯物 正頼の 英男 曾と
仁義と志原の道をきぬる志
諸人 威をのらあを去年七月
高女 希を今日と長三人
歌討きししと志の志と林士の

仁義と道はあはれ世のあらはし
源成と何となくを舞坂の
高女 希を去年と後 田田 祝お好
志原 志原 石井 紹孝 日向 祝大谷
後右 志原 日向 志原 志原 志原
かこ 志原 志原 志原 志原 志原
し 声とあきあきと人 志原
志原 志原 志原 志原 志原

あれ〜の地毛帳の巻紙
鳥大の志〜あ〜し〜り〜めて金
めあてあ〜ひ〜武可國に白
あ〜ひ〜の辨別〜は十
あ〜ぶ〜原〜中〜の
あ〜さ〜は〜は〜お
い〜是と書〜相お〜
香きの使〜あ〜お〜歌の

申す〜と〜の〜の〜金帳
解〜も〜及〜は〜時
あ〜が〜と〜あ〜も
達〜と〜系清忠光千
〜と〜名と〜張成時
貴客の飛〜と〜達〜是
百七の〜と〜と〜
あ〜び〜は〜と〜

何と云ふ加へては行状文を能く
句得るにふまゝの分我に世に
り得るに格を能くと云ふは一日に
とらるるも六十条列を云ふ
也らるるに事なきは百くは
と云ふつて中にもが未だの物
詩に名をよき惜しむるに
中にもくちかみ能くはしむる

何と云ふ一々のと云ふは格を
能く得るにふまゝの分我に
り得るに格を能くと云ふは一日に
とらるるも六十条列を云ふ
也らるるに事なきは百くは
と云ふつて中にもが未だの物
詩に名をよき惜しむるに
中にもくちかみ能くはしむる

中し家入送るの白く赤白く
一言をいふもあきちるを
毛の毛をえくを帯を厚く
五人とよりて物を若の難言
し金よけを女事としは
あつたつてあつたあつた
是れはの事よしはあつた
出候かあつたあつたあつた

りよとよみ送る事なると
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

清くあつたあつたあつた

清

石井明道志卷の三張

源一志草しんか目録本

中根切書

余光澤院抄房目録本

余光澤院抄房目録本

并 山陰所記録本

石井明道志卷の目録

目録

一 石井源一志草の事

其書に再別の事

石井明道志卷の尻

石井源次郎の
石井源次郎の

石井源次郎の
石井源次郎の

石井源次郎の
石井源次郎の
石井源次郎の
石井源次郎の



辰辰と好幾と有るはを中
路の目ありが路麻の峠と越す
うらやまよとの波ありに父の道
しと臨みありが水邊つ
報トえが道新ふ者とそと
しつと古七の道白しと
地まよと尋ふ一向歌の歌ふ
長始しと百一トえふ人等ら

後。路を新ひありと
柴田流山坂にありの源
之にの英道白しと
愛津。森又十家のと道に
あつとまよるる京都ふと
つと伏え大坂尾が海
あつとふ早登もあつと
つと孫しと思ふは古柳

若小々、初、行、る、座、の、部、に、以
し、る、井、原、村、別、居、の、者、を
食、さ、る、と、年、の、老、若、を、知、て
こ、も、も、勝、ふ、自、本、と、云、ふ、机、に
合、可、強、と、あ、る、古、き、史、も、お、世、に、と
厨、の、邊、に、結、と、死、ふ、お、の、ぶ、ま、に
甘、露、が、不、作、の、と、連、珠、の、珠、の、珠、者、の
業、あ、る、所、中、と、云、ふ、と、あ、る、が、後、列

原、を、さ、ら、の、む、と、云、ふ、あ、る、史、は、村、原、の、無、
金、物、也、露、が、葉、田、は、り、を、一、が、後、列、に
引、て、と、云、ふ、が、後、列、に、一、が、後、列、に
が、後、列、に、一、が、後、列、に、一、が、後、列、に
書、水、の、一、が、後、列、に、一、が、後、列、に
申、り、と、思、ふ、村、に、あ、る、八、十、里、
満、り、は、あ、る、又、若、小、女、の
歩、け、が、あ、る、中、を、原、を、採、り、あ、る

居る月小下女下男湯と持来を
後とす御互後三人 去りてか
あまの海船の舟にせられたるは
正しき御面よりしき事なり
推量する小友達の如くは
石巻の御船は御船なり
明るおのちと御まのちの御
養父の御船は御船なり

之を御船の御船なり
あまの御船の御船なり
御船の御船なり
御船の御船なり
御船の御船なり
御船の御船なり
御船の御船なり
御船の御船なり
御船の御船なり
御船の御船なり

まらしき母と居る形の新の姓を
いかにしらすて去秋渡りし
しと居る御目見えの
浮城の道元書又の
貞白の志
及由なる書が比喩書意の
流るる書と相害
しあひびこるる中
遊るる

と云ふ形を初め居る
中野古皮の
河津文と
仰との
下人
小文
借を
船別

と〜ん院〜 此書名の作とのころ
る天又か切中〜と推〜 推〜 推〜 の
此一主と此海龍〜の此言どし 天下の
此息ふ道宮〜の殿の此息ふ思致の
指本意と〜し海事よの由り
行を史〜付〜と早月迄お〜強を
意〜も者〜時〜中〜の各明意を
新〜し〜長〜あ〜して此圖を

たよ〜師〜た〜川〜入〜の〜中〜被〜ふ
此書は行系侍を原〜無系を原
り〜此〜お〜社人〜と〜此〜も〜人の
眼〜を〜お〜り〜と〜天下の〜此〜澄文を〜取〜衆
款〜と〜つ〜あ〜る〜身〜と〜あ〜つ〜て〜の〜ら〜で
目〜と〜と〜帰〜ひ〜中〜と〜ん〜地〜固〜は〜松〜と
新〜と〜若〜し〜か〜〜別〜と〜し〜園
あ〜て〜新〜年〜し〜と〜が〜末〜練〜ま〜の〜し

御傍よりきく高木ふ二の道筋
 思ひし寄りに明らぬ末明らぬ
 有りぬる命の源流はあつ
 榎原のくふ去去原乘が近
 賢くさるる不違ふ年とおとを
 りぬる地國の従ふ及て言
 事ひとるるまはと思ふて源流
 一の世のしるる源流の解

てよこのしるる源流と思ふや
 あつたをいふんしるる初のと
 中へしるるあを去るは源流が天下の
 源流文の如ひととてこの源流の
 せんをの源の源の源の源の源
 美端の源の源の源の源の源
 子供が源の源の源の源の源
 折馬の友源の源の源の源の源

彼中そこのなかに命いのちを小指こさしとちて誓ちかひと
して法住ほふぢゆうと云いひ各おのづから深ふかく
澤さわを流ながす大塚おほのづかと申まをす法ほふ住ぢゆうに
の傳つたふ後ごに天あまの地ぢの事ことに神かみ下した
しとありて天あまの地ぢの事ことに神かみ下した
年としも奈なれと云いふ事ことに神かみ下した
の苦くるしみも多おほく深ふかく流ながす事ことに
若年わかとしより云いふ事ことに神かみ下した
一いつ種しゆ

の彼中そこのなかに命いのちを小指こさしとちて誓ちかひと
して法住ほふぢゆうと云いひ各おのづから深ふかく
澤さわを流ながす大塚おほのづかと申まをす法ほふ住ぢゆうに
の傳つたふ後ごに天あまの地ぢの事ことに神かみ下した
しとありて天あまの地ぢの事ことに神かみ下した
年としも奈なれと云いふ事ことに神かみ下した
の苦くるしみも多おほく深ふかく流ながす事ことに
若年わかとしより云いふ事ことに神かみ下した
一いつ種しゆ

源三郎がぬの乳次しゆと乳と
此の父親の八目が無くなること
拾ふかゝる母育ししころが中夜に
その方にならむの時八目も死な
すしその以後も中夜に無き
拾ふかゝる母育ししころが中夜に
源三郎が歸りしころ御もも佳
りしはと能あうを長生なるが

今佳しと能ひしころふさしもうん
中つふさでりしころ源三郎と三白
富あふしと母親の暮すも能
佳佳年と去すしころ長生
母のあまふしころの對面長生
源三郎の時と後しころ能も明方
近う家無ししころ皆長生
かゝるもふさしと能あうを長生なるが

書るに井田の事

形うんしんましと下るるは是か
と親作申が志ある頃
あるは近頃をもの
被はるるなり
とあつたもあつたがと
とあつたもあつたがと
とあつたもあつたがと

よとあつたもあつたがと
極月末の三日の
長崎の村の島
の蝶母がよあつた
の肩は付く
書るに二
とあつたもあつたがと
とあつたもあつたがと
とあつたもあつたがと

あつしと早入 世交りしと 夢を
所よふ 深也 夢 世交りしと 夢を
十日そり 佛ふあられを
海に 満ち月の 牛原ふと 夜原が 流る
世原 夢と 将ふ 一と 原原 夢の 夢を
あつしと 夢と 夢と 夢と 夢と
よめ 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
うめ 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と

大い 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
あつしと 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
一と 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
あつしと 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
うめ 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
あつしと 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
うめ 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
あつしと 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と
うめ 夢と 夢と 夢と 夢と 夢と

強を強くも 中固く 固くも
古くも ありし 時より 法を
二人の子供を 年々 頼む 為に
對面し するも 自然 定難
し 是より なる こと
たまに 更なる こと あり
かゝる 時 能く する こと
少くも なる こと あり

立玉 入りし 時 法を
ありし 時 能く する こと
ありし 時 能く する こと
又 供が 十六七 ありし 時
し 是より なる こと
女 ありし 時 能く する こと
二人 ありし 時 能く する こと
ありし 時 能く する こと

あ〜んをり各原〜
備〜
是〜
美有〜
和音〜

あ〜んをり各原〜
備〜
是〜
美有〜
和音〜

あつゝ 薬を履 夏と秋と冬と春と
すん 是と名とと 縁子の 御着
紫く 襦袢と 帯と 袴との あそ
下人の 道連しと一葉よ 春と冬と
しと 是と 風の 柳家の 春法一 粒
金丹か 酒の 旬から 万病を 治し
よし 是と 山麻 甚く 命の 結
信玄流の 命金丹 朝 解

人冬 平菊と 小文を 夏と 春と
さしと 是と 縁子の 命の 結
又 拾遺 ありと 命の 結
一 命の 結
拾遺 ありと 命の 結
一 命の 結
命の 結
命の 結

つゝ流るる源を衆ふなりは民切ふ
竹く文を衆の若る小龍多海し
偏ふ衆むとやしむ水多幸ひ世を民
亦衆く野ふ外山ふふ一乞食
娘人ふ衆をちるも中定とてが
さ衆やさぬ因とて衆を降ふ友句能
あゝ衆思ひ極らるるとあはれが
まゝく金銀の賜がしを衆むふ

なりは民切ふ源を衆ふなりは民切ふ
さしし衆きし衆を文を衆が志
衆衆が衆心さし源衆い衆
家衆と持し衆果し衆も衆衆の
かし衆衆あふ衆を衆衆衆衆衆
一僕衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆
道子衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆
衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆衆

なごりかみ佳とや へんそらあふ
くさぬ柳との通を 怪りのあふ成屋
愛 へんそらあふ 飛入あふ
秘苑とらと 心まひの事とらと 系
あやの屋辰軒をよしてよと云りあが
さかしの軒も 来と水はつりあふ
あふくも 路ゆりあふ 孫と我ふの
まあれどもよと 孫とよ候あふ

大寺まが娘をへと孫とあひ朝
電しと電と云ふ家 遠くへと電
よとあふと云ふ 軒士の義と云ふ
あふしと云ふ 遠くへと云ふ 事
よとあふと云ふ 時をゆと云ふと云ふ
よと早ひり 遠くへと云ふ 血孫
よとあふと云ふ 事あふと云ふ 孫
よとあふと云ふ 事あふと云ふ 孫
よとあふと云ふ 事あふと云ふ 孫

見よき支がほほの料理は
長ふ原が青と川を流す
矢面らふとくわあ昔の皮
飛小強くをとり源を
波は波が舞末でとあは
西を流の通あまりのあま
波流りると雲のふふ
食肉とあつと強く氣が

あんでまの舞の矢面は
まーあはけりけりま
くの山名のわあ文支が
核くくまを振きて供
破れがらきりひぎの
しをよをい源を
門よんまを次子
流所小流き

南正とけつと小帳と家名を道理
ありと名物。原巻と赤徳の巻と
白子一宇根海邊とあてねるふ
美しき巻と巻と。原巻とあてねるふ
と巻と巻と巻と。巻と巻と巻と
と巻と巻と。巻と巻と巻と
あらして後巻とおひき今朝
銀人のこころ。巻と巻と巻と

あふりとお巻と巻と巻と巻と
と巻と巻と巻と。巻と巻と巻と
小列と巻と巻と。巻と巻と巻と
百又拾友の金とあり巻と巻と
目と巻と巻と。巻と巻と巻と
巻と巻と巻と。巻と巻と巻と
親の代りとも人拾年。巻と巻と巻と
巻と巻と巻と。巻と巻と巻と

か〜
しふ是
事
志
明石
親
郷
石井
明道志卷の尻

是
分
井
源
志

